

会 議 録

1 会議名

第6回上越市自立支援協議会

2 議題（公開・非公開の別）

- (1) 地域生活支援部会視察研修の報告について（1/13,14 実施）（公開）
- (2) その他(公開)

3 開催日時

平成28年1月19日（火）午後3時30分から

4 開催場所

福祉交流プラザ2階 相談室6

5 傍聴人の数

0人

6 非公開の理由

なし

7 出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

- ・委員：丸山ひろみ、難波祐子、宮越亮、片桐公彦、山崎次男、西山俊彦、井部真澄、飯塚義孝、山川美香、笠原芳隆、田中靖子、牛木秀人
- ・事務局：福祉課 小林係長、安達主任、大島主任

8 発言の内容

（小林係長） ただ今から、第6回自立支援協議会を開会いたします。本日は、中屋委員、青木（美）委員、青木（一）委員、田邊委員、中村委員、山本委員、新保委員の7名から欠席報告がありました。よって、上越市自立支援協議会設置要綱第6条第2項により半数以上の出席がありますので、会議が成立していることを報告します。

（笠原会長） それでは、議事に入らせていただきます。地域生活支援部会が北海道へ視察に行ってきました。参考になる部分がありましたので報告を宮越副会長よりお願いします。

（宮越副会長） 北海道視察の前に11月にもモデル事業の一環として視察を行いました。そちらの報告から行います。両方の施設とも拠点という観点から非常に参考になりました。平成27年11月16日に長野県中野市や飯山市などをカバーしている高水福祉会が経営している『のぞみの郷 高社』を視察しました。ここは自ら地域生活支援拠点を作るという意気込みで取り組んでいる施設です。施設入所支援と生活介護を一体的に行っており、多様な事業

を展開しています。のぞみの郷高社の今後の方向としては施設入所機能を純化する（施設機能は終えていく）という目標を持っています。平成 31 年を目標に生活介護とグループホーム各 3 施設をつくり、入所施設を閉じていくとしています。その一つとして地域生活支援拠点の機能として独自のグループホームを平成 27 年 4 月からスタートさせています。新たに拠点を作っていくということで、総合安心センターを設置する構想を持っています。これが地域生活支援拠点となっていくことで、総合安心センターが地域密着となり、何かあったらすぐに駆けつけられるような障害者の緊急対応を考えています。現在施設にいる職員の交代勤務などの仕組みをそのままグループホームで生かす体制を整えて施設機能を収縮させながら施設のノウハウを地域に返していきます。総合安心センターは地域をカバーするものと考えています。法人の理念が徹底的に職員の中に根付いているので、常に考え事業展開をしていくところに驚きました。理念が現実になるというスタンスでした。職員の研修も徹底していて、勤務時間内扱いで行っています。短期入所の位置づけは緊急時に使えなければ意味がないというコンセプトがありました。定員オーバーでも空きがないかなどを考えて対応するそうです。地域生活支援拠点を作る上で圏域の中で計画を立て議論や報告を重ね進めていくということでした。この法人がつくった地域生活支援拠点の施設が国の示したものと似ているものとなりました。地域生活支援拠点と基幹と連携しながら、様々な調整をしていくということでした。

次に 1 月 13 日・14 日に行った北海道研修について報告します。13 日に行った『グループホームそら』は高齢の障害者に対応したグループホーム運営ということで看取りということも意識されていました。理念としては制度にあるとかないとかではなく、その人に必要な事業を展開していくことが根本にあります。以前重篤になり入所施設でないと対応できないということで暮らす場を変えざるを得なくなった利用者がいたため、暮らしの場を変えずに対応できないかという課題を経験して現在のグループホームができたということでした。医療機関が近くにあるなど周りの環境が良かったため、初めの 1 年は苦労したけれど現在では訪問診療や夜間などの緊急対応ができるようになったようです。それから言葉遣いや仕草などに厳しく、掌を握らない介護（つかんだり、握ったりしない）を心掛け、記録の徹底をし、どこに防犯カメラが置かれても大丈夫である施設だと自信を持っている施設でした。利用者に寄り添った支援を行うということで、どんなに重篤な状態で入院しても最期まで寄り添った支援を行うということでした。

14 日に行った『社会福祉法人はるにれの里』の事業理念は発達障害児者のニーズに特化した多様な事業形態ということです。最終目標は地域で自立した生活を送るということです。地域に溶け込み地域に支えられてという事業目標を立てています。法人としては常に先駆性・開拓性・モデル性・支援ネットワークの構築を目指す、家族を支え・支えられる、職員のやりがいを支える事業運営を目指しています。たくさんの事業展開がある

中で札幌市が指定管理をして運営している『ゆい』という施設を視察しました。『ゆい』の取組は強度行動障害を二次的に強い行動障害という表現を使い、もともとの障害ではないということを位置づけています。入所施設で概ね3年を目標に行動面を専門的に支援して地域へ出て大丈夫である状態になったらグループホームに移り、地域に出ていくということで施設の循環をしています。釘が見えないようにする、強化ガラスを使うなど施設の構造を工夫して同じ障害の人だけを集めて支援をしています。法人の理念を具現化していくことを心がけていました。研修体制も徹底しており、法人全体で勤務時間外に毎月研修を行っていました。実践研究発表ということで法人内のコンクールがあり認められると道内の研修に参加できるという取組もしていました。2階にある『おがる』という発達障害支援センターですが、様々な地域の強度行動障害の研修を行ったり、出前講座を行ったり、持っているノウハウを地域に返していくという取組を行っていました。この施設も地域生活支援拠点として存在していると感じました。

(笠原会長) ありがとうございます。他の参加者で追加情報などはありますか。

(山川委員) 規模が違うので上越市とは比べられないですが、法人の理念の強さを感じました。施設の持ち出しが多くても実施する法人の姿に感動しました。本人に寄り添う支援という言葉をよく聞きますが、そうは言ってもという部分がありました。しかし、ここまで障害者に寄り添った支援を行うことができるということに驚きました。上越市では、と考えたときに周りの施設との連携はどのようにしたら上手に手を結べるのだろうかと思いました。これから研修内容をどのように生かしていこうかと考えさせられる研修でした。

(笠原会長) ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

(丸山委員) それぞれの法人の理念がクリアでぶれていないところです。ぶれないためにはどのような研修をしていくのかというのは法人ごとに違いますが、しっかり考えていると思いました。どの事業も、今この人にこの支援が必要ということがスタートとなっています。一つの法人が様々な事業を行っていて職員の機動力も良いため、それが全体を動かしていると感じました。基本は一人ひとりに何が必要なのか、上越市では今何が必要なのかということを考えてスタートして作っていくということが大切だと改めて感じました。支援者(スタッフ)に求められることは支援力・指揮力・人間力ということを言われていて頭に焼きつきました。

(笠原会長) 今回、私も同行しました。職員が障害や支援について学ぶ機会があるため上手な支援をされていました。上越市では、と考えたときにお金の問題もありますが、あまりお金をかけずにできることから始められないかなと思いました。医療面では上越地域医療センター病院を、講義や研修などは上越教育大学の出前講座などを上手に使っていけないかなと思いました。今後、今出たことについて上越市として上手にやっていけるような提案ができると思いいます。

(安達主任) 13日に行った施設の近くには病院があり立地的に素晴らしいと思いま

した。2つの法人の理念がぶれていなくて感銘を受けました。

- (小林係長) 『グループホームそら』では、障害の高齢者を最後まで見送るということは素晴らしいですが、介護保険料を払っているのに介護保険制度で対応できないのかと感じました。『ゆい』の強度行動障害施設は上越市でも現在課題となっており、強度行動障害者に対する対応にとっても工夫されていて、上越市でも生かしたいと思いました。グループホームの人数は、5~6人位の受け入れで、重度の障害のある人を少人数の小さな施設で受け入れていたことに、大きければ良いということではないと思いました。
- (笠原会長) 質問等ありますでしょうか。
- (井部委員) 私は医療機関でグループホームを運営しています。『グループホームそら』で障害の高齢者の受け入れということで身元引受人がいなくて苦労するケースがあります。どのような対応をとられているのでしょうか。
- (山川委員) 契約についての話はありませんでした。最期をどのようにするのかは、家族とよく話し合うということでした。警察の介入があることがありましたが、身元引受人がいたし施設側が細かな記録を取っていたため、亡くなった後は引き取られていったそうです。しかし、身元引受人がいない場合はどのようになっていたのかは、分かりません。後日、この施設に聞いてみるとよいかもしれません。
- (宮越委員) 記録が大切になってくるので、些細なことでも記録をとることで、後でトラブルが回避できてくると思うので努力していきたいです。
- (山川委員) その他では、日常活動の仕掛けとして、エレベーターはありますが、動ける人はエレベーターを使わず今ある身体機能を最大限生かして活動するということでした。
- (笠原会長) この研修をこれから上越市に生かしていくために協議をしていきたいと思います。これまでの議論を踏まえて地域生活支援拠点のまとめについて事務局から報告をお願いします。
- (小林係長) 資料「上越市地域生活支援拠点等の整備これまでの議論を踏まえて(案)」を説明。
- (笠原会長) ありがとうございます。先ほどの視察の報告と合わせて今までの議論の内容をまとめていただきました。これについて質問等ありますか。
- (山川委員) できれば、山崎委員と片桐委員から施設長の立場としてお話しいただきたいと思います。
- (山崎委員) 現在さくら園では、グループホームの整備ということで平成28年度の計画書を提出し補助金の採択を待っているところです。平成27年度も補助金の申請をしましたが、認められませんでした。かなりの緊急性がないと補助金は認められないと県の話がありました。かなりの緊急とは、崖にある施設を建て替えるなどということでした。さくら園は最大で6人のグループホームです。家庭的な運営やバリアフリーでないという意味がありません。将来的に重度の障害のある人が入居できる施設整備にしていこうと考えています。補助金が見つからないことには何もできません。グループホームは基本的に2,170万円の補助金が付くことになっていますが、県でその額

は出せないと言っています。補助金額を減らして数を増やそうということだと思います。今後も予算がもらえないということであれば、さくら園単独で行う必要があるのかといったことを考えなくてはなりません。ただ重度障害のある人を受け入れたときにネックになるのが看護師です。上越市で看護師を採用して派遣してもらえないかという願いをしていきたいと思っています。そうするとうまくやっけていけるかと思っています。現在、特別支援学校を卒業する生徒で重度障害が多く、生活介護の枠が足りないということが言われています。上越市では補助金を当てにした施設整備は難しいのではないかと感じます。

(片桐委員) 金銭的な話になりますが、グループホームの整備にあたり補助金を受けられない場合、試算したところ入居者の家賃を2万円上げなければならぬため、グループホームの整備にあたり補助金を必要としているところです。補助金をもらえない前提で重度障害のある人のグループホームを建てなくてはならない状況です。消防法の要綱が変わり、既存の建物でも簡易スプリンクラーをつければ大丈夫だと聞きました。

(山崎委員) 簡易スプリンクラーの場合、水道代が年間100万円くらい上がるそうです。既存の建物にスプリンクラーをつければ良いという話ですが、既存の建物での施設運営は良くないです。なぜかという、使い勝手が悪いです。また新築の場合は平屋で造れます。土地が狭い場合を除いて平屋で建てるのが1番良いです。火災の場合、平屋だと窓から逃げられますが、2階建てだと窓からは逃げられません。入居者のことを考えると施設は平屋で考えるべきです。

(片桐委員) 地域生活支援拠点の議論を行っているときに、多機能拠点型のコストを綿密に計算しました。全国の拠点のようなグループホームの家賃を見たら最低でも4万円で一番高くて8万円でした。家賃補助は必ず1万円出るので、3.5万円~7万円の家賃になります。上越市だと新築で3.5万円~5万円になると思います。家賃が安くなるということは法人の持ち出しを多くするしかないので、保護者がグループホームのコストにどのくらい捻出できるのかということを含め、保護者向けの勉強会をしていく必要があると感じました。

(山崎委員) さくら園は家賃1.4万円で1万円の補助金があるので実質4千円の自己負担です。このままだと運営できません。古い建物も新しい建物も同じ家賃ですので、新しい施設は少し家賃を上げさせてもらえるとよく運営していけると思います。4万円の家賃は難しいと思います。自己負担で1.5万円くらいが限度だと思います。

(山川委員) お金を持っている人はいます。そういう人の選択肢として家賃4万円のグループホームがあっても良いと思います。

(片桐委員) 生活を保障してあげたいけど、今後のコスト増を考えると建物に対しての割り返し人数を多くしないと家賃が払えないという事態がでてくると思います。それでも仕方がないということを選択するかということが問題になってきます。少人数のグループホームが求められていますが、15人くら

いの規模になっても仕方ないと思います。

(山崎委員) グループホームは20人まで認められていますが、15~20人くらいになると施設になってしまうと思います。それはうまくないと思います。

(山川委員) 実際北海道のグループホームは18人くらいでした。確かに、このくらいの人数になると施設のような雰囲気でした。

(山崎委員) 人数が多くなるとどうしても入居者同士のトラブルが出てきます。

(山川委員) 1つの建物に複数のユニットを作っていました。

(山崎委員) 建物全体の中で分かれていて一つのグループが5~6人だからと良いと言うけれど、本当にグループホームとして良いのでしょうか。一軒の家に6~7人の家族構成が地域で生活していく上で、本来のグループホームの姿だと思います。

(山川委員) そこは、訓練施設という形でいずれは地域に出ていくということでした。

(山崎委員) 今回の国の大型補正予算のうち何割かを厚生労働省の施設整備にまわしてくれれば良いけれど、全くありません。

(小林係長) 新潟県の話ですと施設整備に係る国の補正予算はありましたが、上越市には施設整備の補正予算の配分はありませんでした。

(牛木委員) 県に確認しましたが、他に未整備の地域があるようで、上越市は整備が行き届いていることから、補正は厳しいとの感触でありました。

(山崎委員) 一生懸命やっているところには、補助金が全く出ません。

(笠原会長) 上越市の現状として補助金が必要になってくるということでした。これについては今後も議論を進めていきたいと思います。その他何かありますか。

(山崎委員) 障害者差別解消法についてはどうなりましたか。

(小林係長) 本日は事務局の準備が間に合わないことから、次回でお願いします。

(笠原会長) 本日の議題についてはここまでとなります。その他ということで事務局からお願いします。

(小林係長) 3 その他に入ります。事務局からは次回の開催日についてです。2月16日(火)15:30~の開催といたします。みなさんから、他にありませんでしょうか。なければ、本日の協議を終了させていただきます。ありがとうございました。

9 問合せ先

健康福祉部福祉課福祉係

TEL : 025-526-5111 (内線 1151)

E-mail : fukusi@city.joetsu.lg.jp

10 その他

別添の会議資料も併せてご覧ください。